

伝統と革新

東谷暁・佐々木良昭・佐藤健志・相澤宏明
三浦小太郎／上杉隆／海江田万里／北神圭朗
山田宏／中尾秀一／木村三浩／犬塚博英
[責任編集] 四宮正貴

Overcoming Japan's crisis. A return to the traditions of the past will create the innovation essential for the present.

「民族派学生運動」「新右翼」から「真右翼」への変遷 我が体験的維新運動史

第25回

護国の英霊、靖国の大神に草莽の誠を捧げる

犬塚 博英
八千矛社・代表

対立が激化する 世界情勢と日本文明の使命 世界維新への道



石破 茂

「明治150年」に向け
新たな国造りへの
意気込みを取り戻す



中西輝政

リ・ナショナリゼーション
の時代に戻るべき。
これが次の時代の
潮流です



西部 邁

自主防衛を宣言せよ。
それが連合側側の
理屈で作られた「戦後
レジーム」からの脱却だ



有村治子

歴史の傍観者にならず、
今、私たちが、足元の
「平和」を主体的に
築いていくのです



佐藤 優

金正男の暗殺について、
日本は軽々に動かず
情報分析に当たるべき



西村眞悟

日本は今こそ
世界維新の道をつくり
ださねばならない

ほぼ沈静化した
靖国神社への「賊軍合祀論」

前号で徳川康久・靖国神社宮司が語ったインタビュー記事（共同通信配信）を契機に、亀井静香代議士や石原慎太郎元都知事らが靖国神社に「西郷隆盛や会津藩など旧幕府軍の『賊軍』を合祀するよう」申し入れた「賊軍合祀問題」に靖国神社が「大きく揺らいでいる」かのような印象操作された報道が目にする事態を伝えた。徳川宮司のインタビュー記事を『静岡新聞』や『中国新聞』など一部の地方新聞が報じた。「私は賊軍、官軍ではなく東軍、西軍と言っている」「向こう（明治政府軍）が錦の御旗を掲げたことで、こちら（幕府軍）が賊軍になった」といった舌足らずの言辞を週刊誌がセンセーショナルに拡大・火付けし、靖国神社が創建百五十年を契機に「幕府軍や西郷隆盛らを合祀する」のではないかと伝えた。

（いぬつかばくえい）
民族革新会議議長。
昭和23年福岡県筑豊生まれ。長崎大学一年次に学内民族派運動に加わり、経済学部自治会役員、全国学協書記長などを経て、同47年卒業と同時に正式上京、一水会結成に参画。中村武彦先生に師事し、一水会退会後に八千矛社を再興継承する（同52年）。民族革新会議に加盟し、維新公論会議、博友会などで民族派の情報交換、連携、理論的深化を目指す。楠公祭、尊攘義軍十二烈士女慰霊祭、神宮参拝視会などの代表世話人を務め、戦闘的維新実践者、正統右翼活動家の育成に励む。

「目立って何ぼ」が政治家の悲しい性だが、亀井静香代議士（元金融担当相）は「最後のご奉公」のつもりか、一人で吠えまくっている。「押しつけて押しまくる」そうだが、振り返れば後統部隊なし、事態はすでに沈静化し、靖国神社では申し入れを真剣に検討した形跡すらない。いわば「門前払い」同然である。盟友・石原慎太郎元都知事に至っては豊洲市場移転問題で都議会の百

条委員会に引つ張り出される「お白州待ち」状態。記者会見では弁明責任逃れに汲々とし、最側近だった元副知事(秘書)に責任転嫁する無責任さ、実に男を下げた。都政の私物化、損害賠償請求など石原親子には地獄の釜の蓋が空いて待っているようだ。

筆者が亀井代議士と面会、激しく口論した際(昨年十月初旬)にも、靖国神社崇敬奉賛会の扇千景会長(元参議院議長)や明治神宮の中島精太郎宮司も「理解を示している」と自信満々な口ぶりだった。筆者は「失礼ながら、それが事実なら両氏にきっちり責任を取ってもらおう」と断言、あくまで亀井氏の手前勝手な解釈だろうが、リップサービスでも判断を狂わせた責任は決して軽くはない。とばつちりを受けかねないのは両氏だけでなく、申し入れに名前を連ねた百名近くの政治家や一部財界人も同様、「靖国合祀問題に深い理解がある」とは到底思えない人物

が多い。

明治天皇の聖旨に反する不遜な策動

百名近い賛同者で事務所が明らかになった「合祀申し入れの会」の面々に、フアクシミリで以下のような抗議文とアンケートを送った。

明治天皇の聖旨に反する不遜な策動 「靖国神社に対する合祀申し入れ」に賛同する軽率な行動に抗議する

【明治天皇御製】

我が国の為をつくせる人々の名もむさし野にとむるたまがき
(明治七年一月二十七日 招魂社にいたりて)

招魂社は明治天皇の聖旨により、国事に殉難された方々をお祀りする東京招魂社として明治二年に創建されました。以来祭祀は天皇国日本の安寧の為に尊い生命を捧げられた

二四六万六千余柱の方々のその身分や勲功、男女の分け隔てなく、御霊安らかなれど日を欠くことなく厳修されています。国民もまた英霊に想いをはせ、感謝と哀悼の誠を捧げる参拝をつづけています。この想いは、今回の申し入れに賛同された皆様とも変わらぬことと拝察致します。

しかしながら今般、石原慎太郎、亀井静香両氏らによつて靖国神社に申し入れられた合祀の問題は、明らかに創建にあたって明治天皇がお示し下さった思召しに反する不遜な行為であると考えます。

たしかに合祀の筆頭にあげております西郷南洲翁は、多くの国民が敬愛する偉人であることに意見の相違はありません。幕藩体制から本来あるべき天皇親政へと導いた功績、また様々に語られる人物像には憧れを抱く人々は多くあります。その最期を明治の第二維新と評価する声も多くあります。しかしそれを心情的に

理解したとしても、現実には、天皇の軍隊と対峙したことには変わりありません。

我が国は承認必謹、天皇親政となりましてからは、幕府軍も西郷一党の行動も天皇陛下への忠とは違ふことを理解しなければなりません。

それでも、天皇陛下は、西郷南洲の事績を評価されていたのでしよう。上野恩賜公園に建立される銅像には多額の下賜金をくだされています。また逆徒として処刑された二・二六事件の将校に対して、昭和天皇がひそかに盆提灯を灯されたという逸話は、今般刊行された『昭和天皇実録』からも拝察することができます。

大御心はすべてを御理解下さっているのです。そこにあえて、明治天皇の聖旨に歯向かい、靖国神社の合祀基準を変更させる策動は、断じて許されるものではありません。また、今回の呼びかけ人と賛同者の多くが、国政に関わるものである

ことも注目しなければなりません。

靖国神社国家護持法案が頓挫してから、かなりの時間が経過しましたが、このたびは、国家護持ならぬ国政に関わる者が靖国神社祭祀を形骸化する不当な干渉を行おうとしているといわざるを得ません。

靖国神社創建の聖旨、そして英霊顕彰の教学を無視した貴殿らの不遜な策動に厳重に抗議いたします。

また、貴殿らの靖国神社に対する思いをお聞かせいただきたく、別紙アンケートへの回答を以つて御教示頂きますよう、お願い申し上げます。

平成二十八年十一月

民族革新会議
議長 犬塚博英

【アンケート】

私ども民族革新会議は、同人すべてが靖国神社崇敬奉賛会に入会するとともに、正式参拝や境内における清掃奉仕活動、また奉納行事を通じ

て、崇敬の念を篤くしています。

各位におかれましても、私どももと考えや立場こそ違え、靖国神社崇敬の念から今回の「合祀申し入れ」に呼びかけや賛同をされているものと拝察いたします。

そこで、あらためて、各位の靖国神社に対する想いをお聞かせいただきたく、下記の質問にお答えいただけますようお願いいたします。

記

【質問①】靖国神社崇敬奉賛会に入会されていますか。

【質問②】直近で靖国神社を参拝されたのはいつですか。

【質問③】靖国神社の御祭神はひと柱ひと柱、お名前、ご出身、戦死場所およびその年月日が漏らさず霊簿に記されておりますが、貴殿が合祀を希望されるすべての方々について、それらの詳細は明らかになっていますか。
(回答送付先、フアクシミリ番号、

メールアドレスを明記)

「明治天皇の聖旨」とは何か。明治十二年六月二十五日の臨時大祭に勅使が朗読した祭文、「大皇国をば安国と知し食す事ぞと思し召すが故に、靖国神社と改称し、別格官幣大社と定め……」と歴代天皇の祭祀の継承を予定したところが靖国神社の最大の特色である。民間の宗教法人になつた後も「社憲」はほぼそのまま継承されている。歴代宮司が「天皇陛下からお預かりしている」と覚悟を定めて奉祀しているのも得心が行く。

抑制のきいた抗議、質問書

筆者は近年めつたに抗議文や質問状を出さなくなつた。独特の文体、言い回し、そして言外に無視されれば、次なる対応を準備していると思はせ、提出するのが常だつた。長い政治活動の中で、そうした抗議や質問が相手に完全無視、黙殺された

経験はほとんどない。戦闘心旺盛の頃に比べれば、今回の抗議文、アンケートは全体的に丁重で抑制が効いた文言、質問も簡潔で三項目だけ、それで十分だ。

どういふわけか、誰一人として返信、回答を寄こしてこなかったが、それも十分想定内のことだつた。ただ、「民族革新会議公式ブログ」が数日間、尋常ならざるヒット数であつたという。抗議文、アンケートを送られた政治家や関係事務所が「民族革新会議」についてネットで調べていたのだろう。知り合いの公安関係者や新聞記者から、政治家から問い合わせがあつたとの情報ももたらされた。

筆者は今回の抗議や質問について回答がなくても、「深追いはしない」ことを同人たちと申し合わせていた。亀井代議士の呼びかけに、「義理あつて」名前を連ねた(貸した)だけ、格別深い思慮あつて、信念を持って賛同したわけでない事情が明

白である。女々しい弁明を、別ルートを通じて当方に伝えてきた「賛同者」が複数いた。

元首相たちの無定見さ

「合祀申し入れの会」の賛同者筆頭に中曽根康弘、村山富市、森喜朗といった首相経験者の名を連ねたことに、「本気度」を疑わせた。

中曽根は首相在任時、靖国参拝が最も多かつたが、「首相の靖国公式参拝」のルール作りをしかけながら、自ら参拝を中止し、その後の首相参拝を困難にした。往生際悪く所謂「A級戦犯」(昭和殉難者)の分祀に政治的圧力をかけ続けた。村山は「靖国を参拝した安倍首相を売国奴呼ばわり」するなど、靖国神社そのものを否定する「老害左翼」。森は「神道政治連盟」では「日本は神の国」などとリップサービスするが、靖国神社問題に熱心だつたとは片鱗も窺えない無定見、無思想な「政治屋」であることは周知されている。

素朴な靖国崇敬の念を持つ賛同者も、こんな連中と一緒に、賛同する正当性を世間に示し得ないだろう。信念を持った回答は皆無だつた。と同時に、靖国神社に政治的圧力をかけたと誤解されかねない動きがピタリと止まつた。

徳川宮司一切ノーコメント

小川寛大君(宗教ジャーナリスト、季刊『宗教問題』編集長)は、古くからの知己・肥後神道人の息子と高校同期生の由、筆者の妻の息子より年少の友人だが、週刊誌ライターが抜けぬ。

「徳川家末裔」宮司の発言が招いた『賊軍合祀論』で議論百出! 『SAPIO』平成二十九年三月号、「大特集 靖国神社をどうするか」(『宗教問題』平成二十九年二月末 17号)と煽つてみても、徳川宮司は一切ノーコメントを決め込み、亀井代議士も「戦いに利あらず」を悟つたのか、「靖国神社合祀」問題の

国民運動もさつぱりである。小川君が靖国神社に徳川宮司へのインタビューを申し込んでも「一連の状況を鑑み、他紙も一樣にお断りさせていた。だいております」との返答だつたそう(前出『SAPIO』)。

最近「享年」以外に使わなくなつた「数え年」だが、神社歴では鼠年生まれの筆者は、数えて「古稀」だと知つて驚く始末。相変わらず熱い血を滾らせる我が身が、古稀の老人入りとは到底信じられない。年のせいで人間に少し丸みが出たのか、万が一にも自分の間違つた判断や情報伝達で、皇室や靖国に関わることで取り返しのつかないことにならないように、言動は慎重の上に慎重を期さねばならないと言ひ聞かせること切実である。

森有礼初代文部大臣の悲劇

薩摩藩士で初代文部大臣を務めた森有礼(一八四七〜一八八九)は、学校制度の整備に奔走し、一橋大学の前身を開設した教育者である。教育の総本山「東京高等師範」の改革、「良妻賢母教育」を国是とすべきと

の近代日本の教育方針を確立した人物である。森の最期は悲劇だった。

明治二十(一八八七)年、ある大臣が伊勢神宮を参拝した際、「拝殿にかかる御簾をステッキで払い除け中を覗き、土足厳禁の拝殿を靴のまま上がった」と新聞が報じた(伊勢神宮不敬事件)。この「大臣」が森有礼ではないかと人々の疑いの目が向けられた。森は英語の国語化を提唱するなど極端な欧化主義者であったことから、世間の誤解を招きやすかった。事件は事実でないとの説も根強く、「真相は藪の中」である。

しかし、これを信じた神宮造営係の西野文太郎(長州出身)は明治二十二(一八八九)年二月十一日、大日本帝国憲法発布式典の日に、森が官邸を出たところで待ち伏せし、出刃包丁で森の腹部を刺した。森は出血多量で翌日死亡(享年四十三歳)。襲った西野はその場で森の護衛に仕込み杖で斬られて死亡した(享年二十三歳)。

の一節を常に口にしていた。

『明治維新という過ち——日本を滅ぼした吉田松陰と長州テロリスト』という「逆張本」を新聞広告で目にする。この手のインチキ「歴史作家」はいつの時代にも出没する。長州出身の安倍晋三首相へのあてつけもあるのか、靖国神社を「長州神社」と決めつける風潮も同様の傾向にある。

靖国神社の御祭神たち

靖国神社の御祭神には「維新前後の国事殉難者」と「対外戦争の戦没者」と大別二つの系列があることを前回も記した。「維新前後の国事殉難者」について、少し詳しく追ってみよう。

現在の靖国神社のある九段坂上に仮設された東京招魂社で第一回合祀祭が行われたのは明治二年六月二十九日(旧暦)、午前二時の「靈招」式を皮切りに数日間にわたり神式での慰霊祭が執り行われた。

事件数日後の『東京日日新聞』によれば、暗殺者西野に対して無名で香典を贈る者や、葬送の際に霊前で祭文を読む者、西野の経歴や逸事を調べて出版し、その代金を将来の祭祀料にしようと計画する者などがおり、民衆にある程度の共感を集めたという。

ネット情報が瞬時に世界を駆け巡る現代は、合成写真作成も容易である。「フェイク(偽物)」とファクト(事実)の峻別が難しい。情報戦に惑わされ踊らされ、万が一にも「敵」と味方の判別」を間違つてはならないと言ひ聞かせている。

明治天皇の大御心 罪あらば我を咎めよ

明治天皇の御製
罪あらば我を咎めよ天津神民は我が身の生みし子なれば

明治四十三(一九一〇)年、大逆を犯して捉えられた幸徳秋水た

合祀されたのは鳥羽伏見の戦以来の戊辰戦争の政府軍戦死者三、五八八柱。戊辰戦争の内訳は北越戦、会津攻防戦で戦死者が多く、戊辰戦争全体では新政府軍の死者三、五八〇人に比し、反政府軍四、六九〇人。藩別内訳では長州五七〇、薩摩五五九、秋田三五一、水戸一〇八など、反政府軍は会津二、五五七、幕兵一、五〇五、仙台八三一人など。会津は確かによく戦った。現在の社殿地に本殿、拝殿の本建築が完成したのは明治五年五月十日であった。

維新前後国事殉難者

明治八年の太政官布告で幕末殉難者も東京招魂社に集中合祀されることになった。これは明治天皇の「厚き思召」により、戊辰戦争以前の幕末動乱期に国事に奔走し、死没した国事殉難者が対象である。具体的には嘉永六(一八五三)年、ペリー率いるアメリカ東インド艦隊が浦賀

ち社会主義者のことを詠まれた御製。御身を害しようとしたものにさえ、「自分の子である」と庇い、助命されようとした御心持ちである。唯々、有り難さに感涙に咽ぶ。

明治元年三月十四日(一八六八年四月六日)、五箇条の御誓文の宣言に際して明治天皇が臣下に賜った「億兆安撫国威宣揚の御宸翰(おくちょうあんぶこくいせんようのごしんかん)には「天下億兆一人も其處を得ざる時は、皆朕が罪なれば……」とある。

「億兆」とは国民全体のこと。「このたび朝政を一新するにあたり、国民の中に一人でもそのところを得ないものがあれば、それはすべて私天皇に責任があるのだから、骨を折り心を苦しめて善政をおこなおうと思ふ」という意味である。

「御誓文」は皇祖神に誓った告文、これは臣下と国民に向けて出された声明である。筆者が私淑した中村武彦師も兄事した野村秋介烈士も、こ

に来航した年、幕末の国難はこの年に始まったとの意識が明瞭である。しかも、合祀の対象者を(これより後も「王事」に身を捧げて斃れた者達)の霊と規定し、今後も皇室、国家のために身を捧げたものと布達した。これが永続的な祭祀施設としての靖国神社建立の発想を基礎づけた(小堀桂一郎『靖国神社と日本人』)。「維新前後殉難者」と呼ばれた祭神は七、三九九柱(『靖国神社百年史』)。「靖国神社忠魂史」や官報、太政官通達などを集計した吉原康和によれば①幕末殉難者Ⅱ二千九百名弱②戊辰戦争の官軍側戦没者Ⅱ四千四百名超③その他、不明Ⅱ約百名となつている(『靖国神社と幕末維新の祭神たち』)。

各資料によつて戦没者の数は相違がある。「維新後」は函館戦争が終わる明治二年となつている。当初は明文化された合祀規定はなかったが、第一回合祀祭で奉られた戊辰戦争関係の祭神には戦死者ばかりでなく、

病死、自決、死因不明も幅広く合祀された。第二回の佐賀の乱の合祀者は官軍が基本で、戊辰戦争の祭神は前例になっていない。

大久保利通(暗殺)、木戸孝允(病死)、伊藤博文(暗殺)といった維新の元勳たちでも維新後の生存者は合祀の対象外である。横井小楠、広沢真臣という「維新の十傑」に挙げられる殉難者(暗殺)とのバランスに比べて、大村益次郎は異例の印象もあるが、死没年が明治二年の函館戦争終了時(暗殺)、初代兵部大輔、軍の最高首脳という特殊事情を明治天皇が聴許にいられたとみるほかにない。

祭神特定の困難さ

官報に掲載された祭神名にも変名や偽名、誤字・脱字も多く、「迷い児」探しが昭和になっても続けられた。亀井代議士たちが言う「国内戦の全戦死者を祀る」ということが、いかに困難か、真剣に検討した節さえな

語る以外に、後輩諸君に残すものは何もない。

ただ人生の折節に、靖国神社を詣で、英霊に奉告し決意を固めて試行錯誤した半世紀だった。上京する度に靖国を訪ねた。三島・楯の会裁判が始まる昭和四十六年早春、靖国神社前前の石畳で三被告と連帯すべく深夜から開門前まで、裁判必勝「徹宵祈願」を行ったことも懐かし。東京を活動の拠点にする際も、先ず靖国神社に奉告した。妻との結婚を決めて、真つ先に二人で詣でた。近くは二年前に喉頭癌のポリプ摘出手術後、見舞いに来た息子一家と靖国を訪ねた。

いのは無責任である。

前記・吉原康和(茨城出身・東京新聞記者)の統計によれば、幕末殉難者(維新前殉難者)の旧藩別合祀者は①水戸藩Ⅱ一、四七九②山口藩Ⅱ七〇五③対馬藩Ⅱ七八各柱と水戸藩が群を抜いている。合祀者が千三百柱以上と天狗党の乱(元治元年・一八六四)の参加者が突出している。維新の先駆けとなった「桜田烈士の井伊大老襲撃」、天狗党の戦死者、藩内抗争により、水戸藩出身で維新後の新政府に登用された高官は皆無に近い。水戸の犠牲で明治維新が成ったといっても過言ではない。

筆者は縁あつて茨城の人士との交友が深い。毎年三月三日、土浦市の八坂神社で執行される「水戸烈士祭」に参列して久しい。祭主の本間隆雄先生は師父・中村武彦が慈父と慕った本間憲一郎先生の娘婿。本間家は代々水戸藩古典医の家系で、桜田門には親族三人が参加している。

両親の野辺送りの「香典返しの真似事」と、少しばかりの献資をさせていただいた。「みたままつり」の前夜祭(七月十三日)の前日が誕生日にあたる縁もあつて、大型提灯を献灯し、民革同人全員で昇殿参拝と提灯前での記念写真撮影が三十年以上の習いになった。

人が神になるのは尋常ならざることである。たつた一つしかない生命を世のため、国のために捧げることが最も尊いことである。献身と自己犠牲は人を神たらしめる。既に高齢者入りした小生など、英霊にも神になれぬ身である。せめて靖国奉賛の感謝の誠を尽くし、貧者の一灯の資

烈士の武具や書簡など遺品の多くを所蔵し、日頃は土浦市美術館に寄託している。烈士祭では遺品に囲まれた社務所で直会が行われる。NHKの「歴史秘話とヒストリア」で桜田門外の変を特集したのが二年前。井伊大老暗殺の凶器「拳銃」を切り口に事件の背景を探る。本間隆雄先生が武器や辞世などの遺品を背にして烈士の人となり解説していた。桜田烈士の決起から八年後、大政奉還、明治維新の大号令が発せられた。水戸烈士の尊い多くの人柱のおかげで維新がなつたと言つても過言ではない。明治維新百五十年を迎えるにあたり、烈士への追悼敬慕に一方ならぬものがあつた。

我が半生、折節に靖国参拝

大学入学時に民族派運動に関わり、今年で足掛け五十年になる。まさに「須臾」(瞬きをする合間)であつた。「我が半生を語る」と題しながら、「我が反省、失敗の運動史」を捧げ続けたい。

亀井代議士は「みんな靖国神社を参拝する国会議員の会」の、集団参拝作法に疑問を感じ、一人で参拝しているという。「国会議員はある意味で権力者。その権力者が群れて行動するのは慎むべき」だと。その言や良し。靖国合祀問題という感性を刺激する微妙な問題を、政治家多数連ねて靖国祭祀、祭祀方式に圧力をかけていると誤解を招く言動は慎むべきだろう。「押しつけて押しまくる」などといった威勢のいい発言は、不要な誤解を生みかねない。亀井静香代議士の沈思再考を切に望むものである。(三月八日記す)

